

2019年12月18日

立教大学国際学術研究交流制度
2019年度「招へい研究員」報告書

1. 招へい概要

受入 教員	所属・職	異文化コミュニケーション学部・教授
	氏名	石井 正子
受入学部・研究科・研究所		異文化コミュニケーション学部
招へい 研究員	所属・職	Assistant Professor IV, Department of Sociology, College of Arts and Social Sciences, Mindanao State University-Iligan Institute of Technology 所属機関所在国：フィリピン
	氏名	Arnold Prudente Alamon
招へい期間		2019年11月6日～2019年12月3日（28日間）
研究経費		529,040円

2. 滞在中の活動

来日および離日を含め、滞在中の活動を記入してください。全日程（毎日）記載する必要はありません。講演会やセミナーなどを開催した場合はタイトル、会場、参加者数等を記載してください。

活動内容記入例）〇〇について研究討議、共同研究、講演、講義、大学院生への研究指導等

*「本学との学術協定（学部間・研究所等間を含む）の締結または既存協定の維持・強化に資する活動」を行った場合は、該当する活動内容に※を付してください。

年月日	活動内容
2019年11月6日	来日
2019年11月7日	専門演習1における講義「社会学者としての歩み：ミンダナオ島の先住民の課題に向きあう」
2019年11月13日	専門演習3における指導：フィリピンについて卒論を執筆する学生の発表に対するコメントおよびアドバイス提供
2019年11月15日	連続セミナー1「絶滅戦争：ミンダナオにおける差別とルマドの闘争」
2019年11月22日	フィリピンのミンダナオ島マラウイ市街戦についての研究討議。2019年11月24日に石井が東南アジア学会で発表する報告に対するアドバイス提供
2019年11月22日	連続セミナー2「非イスラム系先住民の視点からみるミンダナオ島の平和」
2019年11月29日	連続セミナー3「ドゥテルテ政権下における共産党勢力との和平プロセス：ミンダナオ島の先住民の視点」
2019年12月3日	招へい期間終了、私費滞在ののち12月6日帰国

3. 研究・交流状況および成果

上記に記載した活動について、具体的な研究・交流の内容および成果を、本学の学術研究、教育活動、国際交流の進展へ与える効果を含めて、記載してください。講演会やセミナーなどの参加者層（学生、大学院生、一般、教職員等）、会場の様子なども記載してください。

1. 専門演習1における講義「社会学者としての歩み：ミンダナオ島の先住民の課題に向きあう」（11月7日 15:20-17:00 5202）

専門演習1の学生8名に対し、英語で、自身の個人的な経歴をも紹介しつつ、困難な状況におかれている人びとに向き合うことの重要性を講義していただいた。専門演習1の学生は、いずれも社会的課題とそれを生きる人びとについて論文の構想を練ろうとしているところであったが、調査、研究をするうえでの倫理について学ぶ大切な機会を提供していただいた。

2. 専門演習3における指導：フィリピンについて卒論を執筆する学生の発表に対するコメントおよびアドバイス提供（11月13日 13:25-15:05 4252）

専門演習3の学生のなかには、1）フィリピン南部ミンダナオ島の紛争を取り上げた演劇、2）フィリピンの麻薬戦争、をテーマに卒論を執筆する学生がいる。これらの学生2名に、英語で発表をさせ、それに対してコメントとアドバイスを提供していただいた。

3. フィリピンのミンダナオ島マラウィ市街戦についての研究討議（11月22日 15:30-17:00 15号館1107号室）

Arnold Alamon氏が所属するミンダナオ国立大学イリガン工科大学ミンダナオ平和開発研究所は、2017年5月から9月に近隣のマラウィ市で展開されたフィリピン国軍とISに忠誠を誓うグループとの戦闘とその後の同市の復興開発について調査を行なっている。石井も本件については2017年9月から調査を開始し、同平和開発研究所と意見交換を行なってきた。2019年11月24日に石井が調査の結果を東南アジア学会で報告することになっていたため、学会報告資料をもとに意見交換を行い、研究討議を行った。

4. 連続セミナー（11月15日、22日、29日 17:30-19:00 16号館3F第2会議室）

3回の連続セミナーでは、とりわけルマドと呼ばれるミンダナオの非イスラム系先住民に焦点をあてて講義をしていただいた。残念ながら広報が足りず、出席者は第1回6名、第2回6名、第3回8名にとどまったが、出席者はそれぞれフィリピンに行ったことがある本学教員や学生、および専門家や他大学の学生などであり、活発な議論を行った。フィリピンでは、ドゥテルテ政権になってからも、共産党系グループとの関係が疑われるルマドに対する超法規的な殺害が頻発している。この問題に対し、ルマドに対する国家の構造的暴力が説明され、共産党系グループと共闘せざるをえない隘路があることへの理解が重要である旨が述べられた。

（特記事項）本学との学術協定（学部間・研究所等間を含む）の締結または既存協定の維持・強化に資する活動を行った場合は、下記にその内容を記載してください。

<セミナーの様子>

